伝文

日本口承文芸学会 会報
第 70 号　2022 年 2 月 発行

日本口承文芸学会
〒182-8525　東京都調布市緑ヶ丘 1－25
白百合女子大学人間総合学部　間宮史子研究室
Tel：03-3326-5144（内線 1207）
Fax: 03-3326-1319（児童文化研究センター）
E-mail: info@ko-sho.org

蝙蝠（こうもり）の気持ち

伊藤　龍平

台湾での日々を振り返って、とりわけ印象に残っているのは「日本語世代」と呼ばれる老人たちのことだ。植民地時代に皇民化教育を受け、日本語を国語として学んだ方々である。

植民地下台湾では、五度、国語教科書が刊行された。そこには、数多の昔話や神話が採用されたが、「桃太郎」、「猿蟹合戦」などのメジャーな昔話に交じって、いささかマイナーなイソップ寓話「蝙蝠」が、三度も採択されているのには相応の意味が見いだせよう。

植民地統治の開始からわずか六年後に刊行された『臺灣教科用書／國民讀本』（1901 年）所収の「蝙蝠」の冒頭近くには、「昔、鳥と獣が、たくさんあつまってせんそおおしたことがあります。そのとき、蝙蝠わ、「鳥にも獣にもにているゆえ、どちらのなかまえもつかない」といって、はじめわ、ただ見ていました。」とある。蝙蝠は戦況を見て鳥と獣の間を行き来するが、戦後は双方から嫌われ、仲間外れにされてしまう。話は「それゆえ、蝙蝠わ、つねに、やねうらや木のうろのよおな、くらいところにかくれていて、夕方、鳥も獣もいないときばかり、飛びまわるよおになったのだといゝます。」と締め括られ、とくに教訓は付けられていないが、教室で先生が何を話したのかは、おおよそ見当がつく。

1873 年刊の渡部温『通俗伊蘇普物語』の「鳥と獣との戦の話」の末尾には「人もその如く。義もなく信もなく心常に定まらずして。或左或右（あちこち）へ身を倚るものは。果は誰にも憎れて。身の置処なくなるものぞ」とある（平凡社東洋文庫版より）。

遡って、巻子本『伊曽保物語』（17 世紀）の「鳥けだ物と戦ひの事」の末尾には、「其ごとく、人も、したしき中を捨てゝ、むやくの者と与する事なかれ。「六親不案なれば、天道にも外れたり」と見えたり。」とある（ローレンス・マルソー『伊曽保物語』より）。

この巻子本『伊曽保物語』の話について、武藤禎夫は「天草本『イソホのハブラス』では「一族の中を離れて、天下国家を与へうといふとも、敵方に付くな」と、謀反の戒めとしている。」と述べている（『絵入り伊曽保物語を読む』より）。

つまり「蝙蝠」の寓話を通して、年端もいかぬ台湾の子どもたちに、「中国人ではなく、日本人として生きることを選べ」と迫っているのである。これ以上に酷なことはない。

わたしが台湾で接していたご老人たちは、こうした教育を受けた生徒たちの晩年の姿である。そして 21 世紀を生きる彼ら彼女らは、日本人でも中国人でもなく、台湾人という生き方を選んだようだ。「蝙蝠」の話の意外な後日譚といえようか。

口承文芸研究は、言葉と向き合う。その言葉が紡ぎだす話と向き合う。そして話をする人と向き合い、人が生きた時代と向き合う。生きのびるために二つの文化の間を飛び回った「蝙蝠」の気持ちを考えることから、口承文芸研究の来し方行く末が見えてくる。　（神奈川県）

追悼

「福田晃先生、ありがとうございました。」

黄地　百合子（滋賀県）

福田先生がお亡くなりになったと知った後、少し気持ちが落ち着いてからは、感謝の言葉ばかりが頭に浮かぶ。先生に初めてお会いしたのは1971年春のこと。学園紛争の嵐が去った大学で何を学ぶべきかわからず迷っていた三回生の私に、先生は灯を与えて下さったのである。子供の頃から興味を持っていた昔話や伝説やお伽話が、文学研究の対象になると知った驚きと喜び。それから半世紀、福田先生のお導きがなければ、今の私は存在しない。

学生時代、昔話の採訪先の宿では毎夜、報告会の後に先生を交えて酒盛りが始まる。その中で誰かが酔っ払いながら「先生はなぜ研究をされているのか？」と質問したことがあった。40歳くらいだった先生はその時、即座に「自分とは何かを知るためだ。」という風におっしゃったのである。自分とはひいては人間のこと――とも言われ、その答えに私は心打たれ、以来忘れられず反芻してきた。そして、先生の生涯にわたるご業績の数々は、その時のお答えと繋がっていると、厚かましくも密かに思い続けている。

最近のことで一番に思い出すのは、様々な学会の研究大会など、先生はいつも最前列近くの席に座っておられるので、まずお背中に声をかけさせていただいたことだ。会場での先生はどのような研究発表に対しても意見を述べられたが、そのお言葉は得難いご教示に満ちていた。私が不勉強な分野の発表も先生のご感想を通して理解の進むことが多く、また、ご意見の中に自分が感じたこととの共通点を見つけた場合は先生独特の視点を心に刻んで学んだ。そして、先生のお言葉を一言も聞き漏らすまいと、学生の頃のように必死にメモを取ったものであった。

新型コロナ感染症に阻まれて、先生とお会いしたのは2019年秋、長野での伝承文学研究会が最後になった。もうあの大きなお背中に声をかけることは叶わず、示唆に富む鋭いお言葉を聞くこともできない。先生の励ましのおかげで2020年夏には二冊目の拙著を上梓させていただいたが、直接お目にかかってのお礼は叶わなかった。それが何より悔やまれる。

思えば、先生は大勢の弟子に研究の灯をともしてくださり、どんなに忙しくされていても、その灯が消えないよう見守り、お力添えを続けて下さったのだと、改めて実感させられる。先生の大きさが日に日に身に沁みて感じられ、感謝の気持ちは膨らむばかりである。

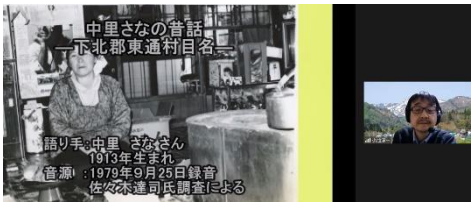
福田先生、本当にありがとうございました。これからもずっと、遠くから弟子たちを厳しくそして優しく見守って下さいますよう、お願いいたします。

第43回日本口承文芸学会沖縄大会　2019年6月1日

第80回研究例会報告　2021年10月30日（土）**「昔話の録音音源の保存と活用」**

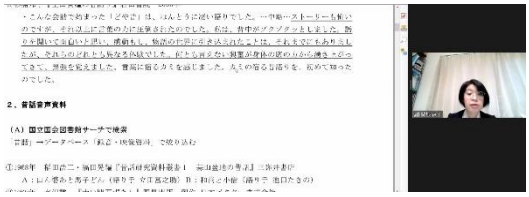
今井　秀和（東京都）

2021年10月30日（土）、ZOOMを用いたオンライン形式で、第80回・日本口承文芸学会例会が開催された。今回の例会は、「昔話の録音音源の保存と活用」と題して、ゲスト１名（法橋量）、会員２名（小池淳一、関根綾子）によるシンポジウム形式で行われた。



最初の報告者、**小池淳一**は**「昔話録音音源の処理と発信 青森県史における口承文芸調査資料から―」**と題した報告を行った。青森県史編さん事業（1996～2018年）の成果である『青森県史 通史編３ 現代・民俗』（2018年）のDVDには音声に加え、映像・写真が収録されている。口承文芸の実地調査は、佐々木達司氏（1932～2020）の発案によって南部、下北、津軽の順番で調査を進めるという編さん事業の枠組みを超え、一次資料（生の「語り」）を柔軟に調査、録音する方針で資料蓄積が図られたという。

報告者はこうした経緯とその意図を確認した上で、口承文芸研究の領域を、録音・映像・写真資料を対象としたものに拡充して継承していくこと、また、それぞれの資料を孤立させずに活用していくことを今後の課題として提示した。



続く**関根綾子「昔話音声資料の活用」**は、かつては語りの場以外で昔話を聞くことが難しかったものの、その語りの場が失われつつある現在にあっては逆に、各地の語りの録音を収録したCDやDVDを付した昔話集が刊行され、また、インターネットその他でも昔話の語りを録音したものが公開されていること（東アジア民話データベース作成委員会「東アジア民話データベース」など）を示した。音声が収録された昔話集の初期のものとしては、『昔話研究資料叢書１ 蒜山盆地の昔話』（稲田浩二・福田晃編、三弥井書店、1968年）に付されたソノシートがあるという。報告者は、時代に応じてメディアを変えつつ録音されてきた昔話の音声資料の活用の可能性として、語り方・会話表現への着目が有効であることを提示した。

法橋量の**「ドイツにおける「語り」のアーカイヴ」**は、現在、民俗学的口承文芸学だけでなく、人文社会諸科学においても大きな広がりをみせる「語り・説話（ナラティヴ）」研究に着目する。中でも、採集した「語り」をいかなる形で記録・保存し、アーカイヴ化するかが重要な課題となっているという。報告者は、ドイツにおける資料アーカイヴ化の流れの中、1970年代後半からハンブルク大学のA・レーマンによって進められた「日常の語り」アーカイヴその他、ドイツの研究機関による音声資料アーカイヴ化の現状を紹介した上で、現在進行形の課題が、音声の文字化、そしてデジタルデータ化にあることを示した。特に、限られた人的・経済的条件のもと、それらを活用可能な形で保管・データベース化していくことの意義と課題が確認された。

各報告者による発表の後は、デジタルアーカイヴされている日本の昔話音源の活用および、ドイツで実践される人文社会諸科学のデジタルアーカイヴ活用方法などに関して、報告者間における質疑が為された。さらに、ZOOMの機能を利用した質疑応答においては、フロアからの質疑や情報提供など、積極的な意見交換が展開された。

受章

川田順造先生を祝う

高木　史人（兵庫県）

本学会会長を務めるなど、常に我々の学問を牽引してくださる川田順造先生が文化勲章を受けられた（以下、いつものように「川田さん」とお呼びする）。

川田さんは「知の三角測量」を志し、地球規模で三角（以上）の場所でのフィールドワークを試みられた。この三角測量はいろいろに拡張できよう。時間軸だと藤井貞和『日本文学源流史』のような三角（以上）が構築される。研究方法やジャンルの三角（以上）など、さまざまな三角（以上）を構想できる。

川田さんの著作では『口頭伝承論』『聲』など多くの著作が本学会と深く関わる。たとえば西アフリカのモシのソアスガでのシンローグについて、当初ポリローグという造語で説明しようとした（「口頭伝承論」第2章注17）。それが共同討議を経て、これも川田さんの造語であるシンローグに代えられたことなどは大いに注目される（ポリローグも捨てがたく思い、シン＝ポリローグや共＝競演という語を私に試みたことがある）。

口承文芸研究を「言葉」から「音声」「身体」にまで拡張して捉える必要を論じるなど、いつも我々に刺激を与え続けくださっている。

最近では2017年度大会での講演が想起される。師のクロード・レヴィ＝ストロース『月の裏側』の紹介を試みられた。けれども川田さんは自説を展開したくてうずうずなさっていた。ぜひ次回は、存分に川田説を論じていただきたい。どうぞ体調に留意なさって、これからも我々を導いてください。

2017年度大会（於・慶應義塾大学湘南キャンパスでの講演場面、撮影・高木）

特集：各地の語り・語り手・語りの場の紹介

「戦争と平和の資料館 ピースあいち」　戦争体験の語り・語り継ぎ

赤澤　ゆかり（愛知県）

次代の平和のために

「戦争と平和の資料館 ピースあいち」は、次代の平和のために、散逸しつつある戦争資料を保存・継承しようと2007年5月4日に開設した民設民営の資料館で、約100人のボランティアで運営しています。開館当初から来てくださったボランティアさんは戦争の体験者も多く、よく当時の様子をお話ししてくださいました。これは自分たちだけで聴いていてはもっ

たいないと、開館の年の夏から「戦争体験の語り」を始めました。忘れようとしても忘れられない悲惨な経験をお話しいただけるのは、「二度と戦争をしてはいけない」という強い意思をお持ちだからです。

そして2009年、ピースあいち「語り手の会」を発足させました（登録メンバー87人）。スタッフがさまざまな面から語り手さんをサポートして、ピースあいち「夏の戦争体験を語るシリーズ」や、小中学校や各種団体に行って、あるいは来館する学校・団体に対して、コロナ禍前は年間約6000人に戦争体験を語っていました。

語り継ぎ手の発掘と育成

「体験を語り継いでもらいたい」という希望を受けて、有志で語り手を取材して「語り継ぎシナリオ」の作成を始めたのが2012年。実働できる語り手さんが40人ほどになった2017年に、ピースあいち「語り継ぎ手の会」を作りました。これを機に、今まで個人で語り継ぐ活動をしていた方がピースあいちに集まり、また作成したシナリオをもとに語り継ぎを始める方たちも生まれました。

2020年には、「戦後75年プロジェクト」の一つとして「戦争体験の語り継ぎ手ボランティア研修」を企画し、参加者を募集。コロナ禍を考慮して人数を絞らなければならないほど、10代から70代まで幅広い年齢の予想以上の応募がありました。研修プログラムを受けるなかで、参加者は語り継ぎたい人とテーマを決め、スタッフのアシストを受けながらシナリオを作成し、試演を重ねて、語り継ぎ手となっていきます。2021年7月に研修が終了。進行具合は人によって違いますが、修了者は「語り継ぎ手の会」に参加し、引き続き「語り継ぎ手」として研修や経験を積んでいきます。

「語り継ぎ手だから」できること

プロジェクトには、語り手さんやそのご家族がとても喜んで協力してくれました。語り継ぎ手も、シナリオづくりを通してより深く、平和について戦争について学んでいます。また実演をするなかで、「語り手」とは違う、「語り継ぎ」の価値にも気づきました。語り継ぎ手は、語り手さんの語りの DVD を挿入してその生の声を伝えると同時に、客観的な歴史的事実を提示し、さらに「語り継ぐ自分はどう考えたのか」も伝えることができるのです。特に若い世代にとって、同じ世代が自分の言葉で語り継ぐ戦争体験は「昔の出来事」ではなく、今現在の問題として心に響く様子なのは驚きでした。

まだまだ未熟なところや課題も多いですが、過去の戦争体験を背景にした「非戦の意思」を語り継ぐ人が育つ場にしていけたらと思っています。

連絡先　〒465-0091　愛知県名古屋市名東区よもぎ台2丁目820
TEL・FAX　052－602－4222
ホームページ　http://peace-aichi.com/
開館日：火曜日～土曜日　開館時間：午前11時～午後4時
休館日：日曜日・月曜日、夏期休館・年末年始休館あり。
入館料：大人300円　小中高生100円。
常設展示：「愛知県下の空襲」「戦争の全体像・15年戦争」「戦時下の暮らし」「現代の戦争と平和」
準常設展示：「戦争と子どもたち」「戦争と動物たち」
学校・団体の見学には、展示ガイド、戦争体験の語り・語り継ぎを実施。

事務局便り

◯受贈書籍（2021年9月～2022年1月受け入れ）

・國學院大學説話研究会調査／髙塚さより編『新潟県旧中頸城郡　板倉町〈口承〉民俗誌―関田山脈北麓山寺三千坊の地―』2021年3月
・小池淳一編『新陰陽道叢書　第四巻　民俗・説話』名著出版　2021年10月

〔以下の書籍は、國學院大學の旧事務局宛に届きましたが、コロナ禍で現事務局への移動が遅れてしまいました。お詫びして掲載いたします。〕
・日本民俗学会『日本民俗学』第300号～第301号、第303号、第306号～第307号　2019年11月～2020年2月、2020年8月、2021年5月～8月
・『国立歴史民俗博物館研究報告』第219号、第223号～第228号　2020年3月、2021年3月
・新潟県立歴史博物館『守れ！文化財～モノとヒトに光を灯す 2019年度事業報告書』2020年3月
・『奈良県立民俗博物館だより』vol.45～46　2020年3月～2021年3月
・佐々木高弘著『シリーズ　妖怪文化の民俗地理4　妖怪巡礼』古今書院　2020年11月
・『新潟県立歴史博物館研究紀要』第22号　2021年3月
・新潟県立歴史博物館『守れ！文化財～モノとヒトに光を灯す　2020年度事業報告書』2021年3月

◯日本口承文芸学会事務局
〒182-8525　東京都調布市緑ヶ丘1－25
白百合女子大学人間総合学部　間宮史子研究室
Tel：03-3326-5144（内線1207）／ Fax: 03-3326-1319（児童文化研究センター）
E-mail: info@ko-sho.org

日本口承文芸学会を広くご紹介下さい

日本口承文芸学会への入会を希望なさる場合は、事務局にご連絡いただくか、学会ＨＰ（https://ko-sho.org/）から入会申込書をダウンロードして、ご記入のうえお送りください。入会金なし、年会費4000円です。郵便振替口座　00180-4-44834をご利用下さい。